

## 1 学校紹介

本校は東金市の中心にあり、商店街、官庁街と農村地帯から成り立っている。学区の人々は教育に対して協力的である。

児童は、明るく素直で学習にも運動にも意欲的に取り組んでいる。「夢と志を抱く たくましい文化人の育成」という学校目標を掲げ、一人一人のよさを伸ばす指導を心がけている。

## 2 研究主題

「自ら考え、表現する児童の育成～目的に応じ、表現を工夫して書くことを通して～」

### (1) 研究教科 国語科

### (2) 研究仮説

- ①ふりかえりを生かした魅力的な学習課題が設定できれば、自ら考え主体的に学ぶ児童が育つであろう。
- ②目的に合った表現の仕方について話し合う場を設定すれば、互いに表現を磨きあい表現力の向上が図れるであろう。

## 3 研究の概要

### (1) 児童生徒の実態と課題

令和3年度の研究では、「書くこと」の単元開発や教材研究に力を入れ、「見いだす」の場面で児童にとって魅力的だと思われる学習課題を指導者の側から設定することに力を入れてきた。その結果、多くの児童が「書いてみよう」という意欲をもち、最後まで粘り強く書くことができた。

しかし、授業の中で「与えられた課題には意欲的に取り組むが、個人で課題を見いだすことができない」「友達の文章が読み取れず、文章をよりよくするための考えをもつことができない」「推敲の話合いで、よい表現であるにもかかわらず友達から言われるままに書き直してしまう」という児童の様子が見られた。このような児童の姿から、自分が書いた文章について「よりよくなった」という実感をもつことができていないのではないかという課題が残った。

#### 【全国学力・学習状況調査の分析結果から】

令和3年度と令和4年度の結果を比較すると、「書くこと」については、正答率が伸びており、昨年度からの授業改善の成果が表れていた。ただし、「読むこと」については、依然として課題が見られた。この結果から「読むこと」と「書くこと」を複合的に指導していく必要があることがわかった。

#### 【令和4年6月の児童の意識調査から】

「書いたものを友達と読んで、気付いたことを話し合っていますか」の設問では、80.5%の児童が肯定的な回答をしていた。「学習をふりかえり、次の学習のめあてをもつことができますか」の設問では、77.6%と、若干数値が低くなっていた。どの児童も自分の学びや学び方をふりかえり、主体的に学ぶことができるようにしていくためには、ふりかえりの仕方を工夫していく必要があると考えた。

## (2) 学力向上のための取組

県の施策である「『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム」を活用し授業改善を行った。

### 【重点を置いた取組】

- ①「まとめあげる」の場面で、身に付いた力や学び方についてしっかりとふりかえり、「見いだす」の場面で次の学習へのめあてをもつ。このサイクルにより、魅力的な学習課題の設定ができるようにする。
- ②「広げ深める」の場面で、目的に合った表現になっているか視点を明確にして話し合う場を設定する。

### ①ふりかえりをいかした魅力的な学習課題の設定…「まとめあげる」→「見いだす」

#### 手立て1 ふりかえりの実態をつかむ



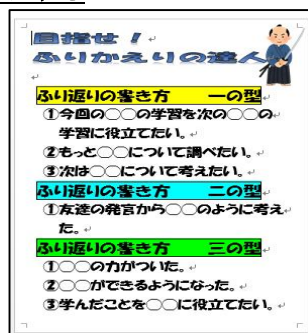
教職員研修で、児童が授業の中で書いたふりかえりを分析した。ふりかえりを読むと、児童が授業の中で何をどう学んだかを把握することができた。「ふりかえりから児童の疑問や思いを取り上げ、課題を設定できるのではないかと授業へのいかし方を検討することもできた。ふりかえりの書き方がわからず、うまく書くことができない児童がいる実態も明らかになり、そのような児童に対する手立てについて話し合った。

〔ふりかえりを分析する教職員〕

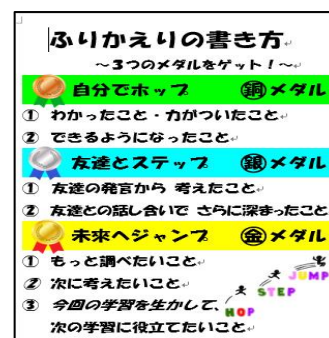
#### 手立て2 ふりかえりの視点を明確にする



〔低学年部会〕



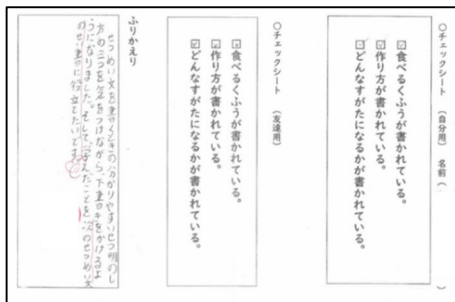
〔中学年部会〕



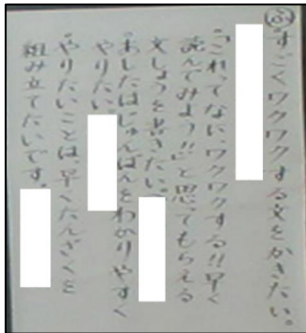
〔高学年部会〕

どの児童も自分の学びや学び方をふりかえることができるよう、低・中・高学年部会ごとに、ふりかえりの視点を明確にしたふりかえりの書き方の掲示物を作成した。低学年部会の「たのしかった」という視点は、友達との学び合いの様子を書くことを想定している。児童の感想からも児童の学び方をとらえることができるのではないかと考えたからである。中学年部会では、文章の型を提示し、児童が書きやすくなるよう工夫した。高学年部会は、「自らの学びをふりかえること」「友達との学びをふりかえること」「学びをいかすことやつなげること」に視点を置いた。各教室に常時掲示し、国語科だけでなく他教科でも視点を明確にしてふりかえりを書くように取り組んだ。

### 手立て3 本時のふりかえりから課題を見だし、次時のめあてにつなげる



〔チェックシートのあるふりかえりカード〕



〔前時の児童のふりかえりをまとめた掲示物〕

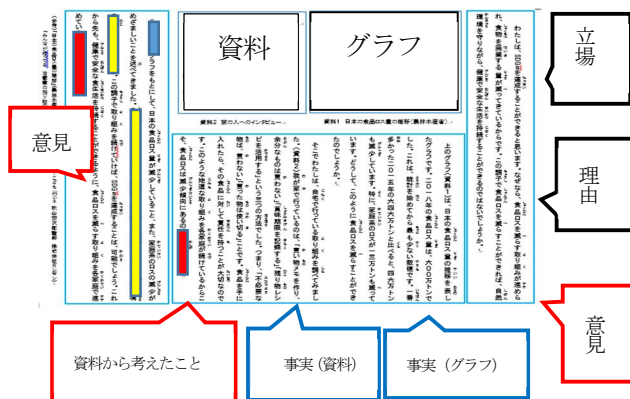
3年生の『食べ物のひみつブックをつくろう!』の実践では、チェックシートとふりかえりの記述が一体になったカードを活用した。チェックシートは、付いた力を明確にする上で有効であった。すべての項目にチェックができた児童は、自信をもって次時のめあてをもつことができた。チェックがない項目がある児童については、指導者と補習をし、次時に備えることができた。ふりかえりの記述からは、友達との学び合いの様子やつまずきなどがわかり、指導や評価にいかすことができた。

2年生の『2年2組の町たんけん おもしろいもの見つけたよブック』をつくってしらせよう!』の実践では、前時の児童のふりかえりを掲示物にまとめて提示した。

授業の導入で前時のふりかえりを共有することで児童の思いや願いをいかした学習課題を設定することができた。児童は、自分のふりかえりが授業にいかされたことで意識が高まり、最後まで粘り強く取り組むことができた。

### ②目的に合った表現になっているか、話し合う場の設定…「広げ深める」

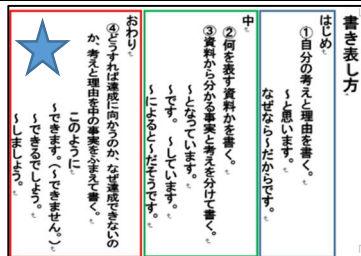
### 手立て4 モデル文の提示により着目するポイントを明確にする



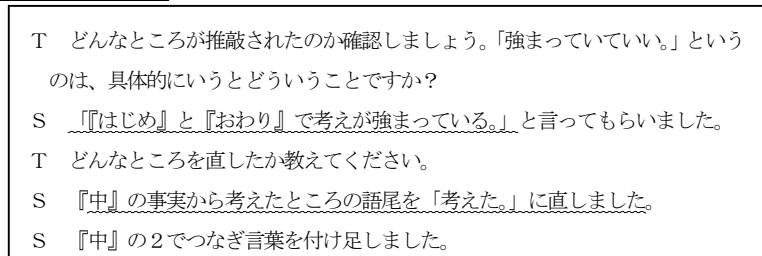
〔「鶴嶺小SDGsを発信しよう」(5年生)モデル文〕

5年生の「発信しよう!鶴嶺小SDGs」の実践では、モデル文の提示の仕方を工夫した。着目させたい部分を意図的に隠し、どんな表現にしたらよいかを話し合わせることで、事実と意見の文末表現の違いや根拠を明確にした文章の書き表し方などに気付かせることができた。児童は、自分たちが書いた文章をモデル文と比較しながら読み、言葉による見方・考え方を働かせながらよりよい文章になるように話し合うことができた。

### 手立て5 目的に合わせ、話し合いの焦点をしぼる



〔書き表し方のポイント (掲示物)〕



〔推敲の場面「広げ深める」の授業記録より〕

推敲の授業では、説得力のある意見文にしたいという目的をもち、「双括型になっているか」ということに焦点をしぼって話し合いをした。児童は、『おわり』の部分に「考えと理由を『中』の事実をふまえて書く」ことで考えが強まることがわかり、双括型のよさに気付くことができた。

## 手立て6 話し合いの意図を明確にするため、付箋を活用する



〔付箋を活用して話し合う児童（5年生）〕

友達に相談したいところを黄色の付箋に、友達へのアドバイスを青い付箋に書くことで、視覚的に互いの考えを理解しやすくなり効率的に話し合うことができた。児童は、付箋を返し合うことで友達との学び合いのよさを実感することができた。さらに、推敲した部分を半透明な付箋に書くことで、修正前後を比較することができ、自分の文章がよりよくなったという確信を得ることもできた。

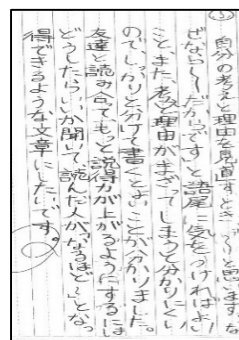
### （3）加配教員（学習サポーターを含む）の活用

本校では、令和3年度には加配教員を3年生以上の国語科の時間に配置し「書くこと」への指導を充実させてきた。今年度は、1年生と4年生の国語科の授業に加配教員や学習サポーターを配置し、担任とのチームティーチングなど指導体制を厚くすることで、入門期の1年生の児童が安心して学習に取り組むことができるようにしたり、学力差が開き始める4年生の「書くこと」が苦手な児童に対して、必要な支援ができるようにしたりしてきた。児童の実態に応じた、きめ細やかな指導を継続することで、児童の発達段階に応じて語彙を増やし、書く力を向上させてきた。

## 4 成果

令和4年6月と12月の児童の意識調査を比較すると、「学習をふりかえり、次の学習のめあてをもつことができますか」という設問について肯定的な回答をする児童の割合が7.7%向上した。ふりかえりを意識した授業づくりにより、児童は自分の学びと向き合い、学習への見通しをもつことができるようになってきている。前時の児童のふりかえりを授業の導入で提示し共有することで、児童の思いをいかした学習課題を設定することもできた。

また、「書いたものを友達と読んで、気付いたことを話し合っていますか」という設問では、肯定的な回答をする児童の割合が6.3%向上した。着目する視点を絞って、文章を書いたり話し合ったりすることで、自分の考えを明確にし、書き表し方を工夫することもできた。



〔児童のふりかえり（ノート）〕

## 5 今後の課題

主体的な学びの実現のためには、児童一人一人に学びを調整する力を付けていく必要がある。これまで児童の思いをいかした学習課題を設定するよう努めてきたが、さらに明確なめあてをもって学習に取り組むためには、自らの学びに応じた個別のめあてを設定できるようにしていくことが肝要である。そのためにもICTの活用を視野に入れ、児童一人一人にとって最適な学びの場となるよう授業を改善していきたい。



〔ICTを活用したふりかえりの提示〕

また、昨年度と比較すると、授業の導入である「見いだす」の時間が短縮され、「まとめあげる」の時間が確保できるようになってきてはいるものの、「自ら考える」「広げ深める」の活動に時間がかかると、「まとめあげる」の場面で、ふりかえりを書く時間を十分にとることが難しいという課題がある。活動や指導事項を精選すること、「見いだす」「自分で考える」「広げ深める」「まとめあげる」の時間配分を見直すことで、ふりかえりの時間を十分に確保できるようにしていきたい。

さらに、書く力を向上させるためには、読む力の向上が求められるところである。「書くことが苦手な児童は、読むことにも課題がある」という実態も明らかになった。今後は、「書くこと」と合わせて「読むこと」の指導の充実を目指していきたい。